

「本無義」考

林 伝 芳

西晋時代の仏教思想界において、般若經典の教理的根柢である空についての解釈が分歧し、その代表的なものに三家の説があることをはじめて明らかにしたのは僧肇撰述の『肇論』である。ところがこの『肇論』には、三家の学説は紹介されているものの、三家の名義についての説明が不十分であつたために、後世にいろいろな問題を残した。その中の本無について言えば、「本無論者はどういふ説を唱えたか」については、きわめて明快にのべられているが、「本無とは何か」についての部分ははつきりしなかつた。このために、のちの注疏家たちはそれぞれの観点から本無の意味を模索し、これを附会して解釈しようとしたので、ついに見解が分かれるに至つた。したがつて、本無説の内容はどうであるか、またそれは誰の説であるか、という問題を探討する前に、本無とは何か、つまり本無の定義を明らかにしなければならないと思う。

本無という言葉が仏教語として漢訳仏典にはじめて現われるのは支婁迦讖訳の『道行般若経』においてである。この経

の第十四品が「本無品」となつており、経文にも「一切皆本無、亦復無本無」という語句が見られる。この経の同本異訳とされる支謙訳の『大明度経』と竺仏念訳の『摩訶般若鈔経』の相当部分にも、同じく本無という言葉が使われている。この本無という術語が梵語の *tattava* の訳であることは、のちの羅什・施護・法賢ならびに玄奘の訳本と対照して分かることであるが、羅什はこれを大如または如、施護と玄奘は真如、法賢は如実と訳している。漢訳仏典の場合、たとえそれが訳語であつても、意訳であればこれを訓訳的に理解しようとする習性が中国仏教者の中によくある。特に注疏家たちにはこの傾向が強い。

『肇論』は「宗本義」の最初のところで、

本無・実相・法性・性空・縁会、一義耳。

とのべたあと、本無の意味について、

実相自無、非推之使無、故名本無。

とその語義を明らかにした。この意味をさらに詮釈敷衍した

のが宋の遵式で、彼は『注肇論疏』の中で本無の言葉を取り上げ、

此名有二釈。一、本謂本來、無即是寂。謂一真心体、三際湛然^③。

と解釈した。これによると、本無の二字を読みこなせば「本来無(空寂)である」という意味が一段と明白になった。中村博士の『仏教語大辞典』もこのような解釈をしている。それならば、なぜ「宗本義」のところで実相・法性・性空・縁会などと同義であるとのべられ、また『道行般若経』の同本異訳の対比によつてそれは真如と同義であると見られている本無を、「不真空論」のところでまたこれを批判しなければならぬのか。「宗本義」で一度肯定した本無を「不真空論」で否定する理由はどこにあるのか。あるいは「本来無である」という読み方の外に、別の読み方があるのではないか。これに示唆を与えてくれるのは遵式の『注肇論疏』の前出の続きの文である。それによると、

二、本謂本源、無即泯絶。謂万派帰源、名相斯泯。

とある。これは「本源が無である」ということに外ならない。遵式の意としては、どちらも本無の語義についての正しい解釈であるとしているが、「宗本義」の「非推之使無、故曰本無」のくだりに対しては(一)の解釈、すなわち「本来無である」の方をこれに当てていることから、(二)よりも(一)の解釈が妥当であるという立場を取っているようである。しかしな

がら、「不真空論」の本無義のところで遵式もまた幾多の先人注疏家と同じように、本無の意味をはつきりとのべなかつたのは残念である。

ところで、とくに注目すべきことは、万物の本源を無となすという考え方は魏晉時代の老莊学界の中心思想であつたことである。魏の何晏・王弼が「天地万物、皆以無為本、無也者、開物成務、無往不存者也^③」と主張し、また裴頠の「崇有論」にも指摘しているように、当時の思想界には「貴無之論」や「虚無之言^③」がはやつた。したがつて、「本来無である」という風に理解された本無という言葉は、非有非無の中道空を意味するものであるのに対して、「本源が無である」という風に理解された本無は、仏教で言えば非有のみを見て非無を見ない但空の見解に当り、また老莊思想からすれば、それはすなわち何晏・王弼の貴無論と相通するものである。

さて、『肇論』がこれを取り上げて論評を加えた本無説の内容を見ると、はじめに、

本無者、情尚於無、多触言以資無^③。

とある。横超先生はこれを次にくる二句とあわせて本無論者の主張であると見ているが、遵式の注ではこれを論主(すなわち僧肇)が本無論者の見解を要約したものであるとしている。ところで、最初の「本無者」の三字をどういう風に読むかについては、従来の注疏家たちはそこを素通りにして下文の解

釈に入っているため、その考え方をすることはできないが、現代の学者たちは概ねこれを「本無説^②は」とか、「本無の一派は」などと訳しているところから見ると、何れも「本無論者の説はどうであるか」という風に理解していることが分かる。つまり本無を単に一つの学派を指す固有名詞として受け取っているのである。これを文字通りに「本無とは」と読んだらどうであろうか。そしてこれに続くところを、「ここに無を尚び、無に偏る説を唱える」ことを言ひ、と解したら、そのまま本無二字の語義を解説したものとなるのではないか。ことに無を尚ぶの一句は本無の定義を示したもので、次の一句はその補説であると見てもよいのではないか。心無・即色の二説に関する部分でも、表現こそ違ひが、それぞれ心無・即色を定義づけるような文章表現になっているから、本無のくだりだけが例外とは言えないだろう。次に、

故非有、有即無、非無、無亦無。

とあり、「非有」以下は本無論者の説から引用したものとと思われるが、これは明らかに但空説の見解である。のちに本無論者に比定された人たちの現存の文献からはこのような文句が見られないかわりに、裴頠の「崇有論」の中で、王衍らの貴無論者が「於有非有、於無非無、於無非無、於有非有」を主張し、無を宗となすと指摘したのは興味深いことである。さらに、『肇論』は、

尋夫立文之本旨者、直以非有、非真有、非無、非真無也。何必非有、無此有、非無、無復無。

とのべてあるが、遵式はこれを二段に分け、前段は正義を開示したもの、後段は異見を責めたものとしているけれども、これはともに本無説を論評したもので、前段は中道空を明かしたもので、後段は但空説の誤りを指摘したものである。そして最後には、

此直好無之談、豈謂順通事實、即物之情哉。

とのべて、前述の尚無（無を尚ぶ）の説を好無（無を好む）の論だと貶し、きびしくこれを批判した。

このように、『肇論』の「不真空論」で取り上げられ、そして批判された本無の説と、*śūnyatā*の訳語である本無の内容とは全く違うものであるばかりではなく、発生論的に万物は無から生じ、無を万物の本源とする老莊的な貴無論とも趣きを異にするものであることは、『肇論』を詳読すれば自ずから分かるものである。これは言うまでもなく、僧肇が取り上げた無を尚び（尚無）、無に偏る（賓無）意味での本無であつて、小乗の但空説を指すものである。ところが、原典の『肇論』を解釈した陳の恵達の『肇論疏』が、『肇論』の原意を十分に把握していないばかりか、その注釈の中で私見を加えたために、『肇論』の正しい理解をさらに困難にしてみつた。恵達は本無の定義を明らかにせずに、道安を本無説の主張者に

断定した。その根拠として惠達は、

本無者、弥天釈道安法師「本無論」云、明本無者、称如来興世、以本無弘教、故方等深經、皆云五陰本無、本無之論、由来尚矣。¹⁰⁾
……

とのべた。このうち、「如来興世」以下は『名僧伝』の曇濟伝から転引した『七宗論』の文であるが、惠達が冒頭に「弥天釈道安法師……」の言葉をつけ加えたために複雑化してしまつた。道安に「本無論」なる著作があつたかどうかも疑わしいことであるが、仮にあつたとし、そして上引の文章があつたとしても、ここにいる本無とは *tathata* の訳語に当たるもので、僧肇の肯定するところである。『肇論疏』はさらに、

盧山遠法師「本無義」云、因縁之所有者、本無之所無、本無之所無者、謂之本無。本無与法性、同実而異名也。

とのべた。本無と法性が同義であることは『肇論』の巻頭ですでに明らかにしており、僧肇の認めるところである。しかし、三家義の一である本無義は僧肇の否定する異説であるはずなのに、その主張者に道安を当てるとは前後あい矛盾しているのではないか。しかもその説明の中で道安・慧遠の言葉を引き、本無と法性とは同義であることを証拠立てようとするところなどは、なおさら理解に苦しむところがある。

これに疑問を抱いた隋の吉藏は、『中観論疏』の中で反対に道安を弁護するかのように、

安公明本無者、一切諸法、本性空寂、故云本無。此与方等經論、什・肇・山門義、無異也。¹¹⁾

とのべ、道安を『肇論』三家義の批判対象から除外し、代わりに琛法師の説を当て、また唐の元康は竺法汰の説をこれに当てた。

要するに、『肇論』が批判対象としてあげた本無と *tathata* の訳としての本無の区別をはつきりさせなかつたこと、最初の注疏である『肇論疏』が解釈の過程で自己矛盾を起こしたこと、のちになつて惠達の説を踏襲するものと道安を擁護する立場を取る注疏家との間に対立が起きたことなどの原因が重なつて、ついに諸説紛紛たる結果となつたのである。

- 1 大正藏四五卷、一五〇頁下。以下同。
- 2 統藏經一ノ二ノ一ノ二、一〇二葉a。以下同。
- 3 晋書卷四三、王衍伝(王戎伝附見)。
- 4 晋書卷三五、裴頠伝(裴秀伝附見)。
- 5 大正藏四五卷、一五二頁上。以下同。
- 6 中国仏教の研究・第二、一六九頁。
- 7 肇論研究(塚本善隆編)、一六頁。
- 8 不真空論今訳(漢唐仏教思想論集附録)、二九一頁。
- 9 前掲裴頠伝の中の崇有論。
- 10 統藏經一ノ二乙ノ二三ノ四、四二九葉b。以下同。
- 11 大正藏四二卷、二九頁上。